ＮＯ．３　　令和６年４月２４日　東彼杵町立千綿小学校長　中路　知恵

千綿っ子だより

ちからを合わせて
わらい声あふれる
たのしい学校

入学式

～６歳の春　節目～

人生の中で、「節目」となるときが誰でもあります。後から思えば、あの時が私の「節目」だったと気づくこともあります。

私自身、今思うと「節目」の時には必ず、自分の生き方や考え方に影響を与えてくれた大切な人との出会いがあったように思えます。その中の一人を紹介します。

私が教師という道を歩み始めた４月のはじめ、一本の電話がありました。それは、私の小学校１年生の時の担任の本田先生からでした。本田先生は、私の名前を新聞発表で御覧になり、うれしくなって電話をされたとのことでした。当時私は２４歳。教師１年目。そんな私に、本田先生は嬉しそうに「あなたは１年生の時・・・」と当時の様子を語り、激励の言葉をくださいました。私は、正直、自分がどんな子どもだったのか思い出すことはできませんでしたが、本田先生からの一本の電話は、間違いなく、その後の教員人生にとっての「節目」となりました。

４月１０日、新たなスタートをきった１５名の新１年生。ここ千綿の地で始まる多くの出会いと経験が、大切な「節目」となるよう支えてまいります。

もう小学生だから・・・

すべての子どもは生まれながらに「触れてほしい、抱っこしてほしい」という欲求をもっているそうです。愛情ある抱っこで応えてあげると、子どもは安心し、自分が大切な価値ある存在であると思えるようになり、抱っこしてくれる親や大人に信頼を寄せていきます。この心の根っこにある安心感や自己有用感が、子どもが成長して人間関係を築く上でも大切なことだと思います。

「もうあなたは小学生だから、一人で・・・」と、ある時期すぱっと触れ合うことを断つのではなく、時にはぎゅっと抱きしめて「大好き」と声をかけてあげてください。高学年になると、「もうやめてよ」と振り払おうとする子どももいるかもしれませんが、心の中はきっと、やわらかいスポンジのように愛情をいっぱい吸い取っていると思います。

「大切にされているという実感の積み重ねが、自分も人も大切にすることができる子どもを育てるのだ」と信じて、千綿小学校職員もすべての子どもたちに愛情を注ぎ続けます。